

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 24 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520018

研究課題名(和文) 行為の演技論的分析と新たな社会哲学の原理

研究課題名(英文) New principles of social philosophy in terms of the play-acting theory of action

研究代表者

田村 均 (Tamura, Hitoshi)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：40188438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の継続期間中に8篇の論文を公表した。最初の論文は、行為の演技論的説明によって自己犠牲的行為を説明するものであった。自己犠牲への関心は期間中のすべての論文に関わっている。

第二の論文では、実験哲学の手法により、行為説明の比較文化論的な考察を行なった。そして、日本的な行為説明がしばしば行為者と周辺環境の協同による結果として行為を説明するものであることを見出した。

残る6篇の論文は、周辺環境の要因を行為のためのシナリオと見なす立場をとり、自己犠牲のように見かけ上は不合理な行為でも、シナリオによって与えられる虚構空間において合理的説明が与えられるということを見出した。

研究成果の概要(英文)：I have published nine papers while this study project has been carried out from 2010 to 2014. The first one published in 2010 was about the explanation of self-sacrificial act by means of play-acting theory of human action. The act and concept of self-sacrifice has been the basic concernment of the whole series of my papers written on this project.

The second paper was about the cross-cultural perspectives for folk-psychological explanations of human action. I have found that the Japanese view on action typically involves an attitude that looks upon an action as a collaborative outcome of the agent and the socio-cultural environment. The totality of the environmental factors can be regarded as an action scenario for the agent.

The rest of my papers are about the possibility of taking scenarios seriously and I have found that a seemingly irrational action, such as self-sacrificial one, can be reasonably explained in a fictional space set up by the scenario for the agent.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：自己犠牲 行為論 演技 虚構 fiction 意志 権力 共同行為

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景は、近現代西洋哲学における人間の行為の理解、すなわち、哲学的行為論である。本研究の行為一般を演技として分析する立場（以下、「本研究の立場」と言う。）は、従来の行為論と、次の2点で大きく異なる。

（1）【行為の共同性】 本研究の立場では、個人の行為を、その個人を含む集団の慣習や規範や制度がシナリオとして作用した因果的帰結と見る。すなわち、従来の行為論のように、行為を或る個人単独の心的状態（欲求や信念や意図）の因果的帰結とのみ見るのではなく、集団的志向性の因果的帰結とも見なす。言い換えれば、本研究の立場は、デイヴィドソン等の「行為の因果説」を社会的な次元へと拡張するものである。

（2）【行為者の相対的な私秘性】 本研究の立場では、集団的な志向性（シナリオ）に沿って個人が行為するとき、同時にその個人の私的な心的状態が、現実の行為とは別にかつ現実の行為と背馳しうるものとして存在する、と認める。ちょうど、俳優が脚本に従って演技する際、脚本に対する俳優個人の私的で批判的な思念が演技上の所作とは別に存在すると認められるように（なぜなら、脚本に批判的でも俳優は所作を実行するからだ）、たとえ集団的なシナリオに沿って行為していても、その個人の私秘的な心的状態が、そのシナリオに相対的に、そのシナリオへの批判的な思念として認められるのである。こうして、いわゆる一人称の私秘性（privacy）が、第三者からの絶対的な到達不能性ではなく、シナリオに沿う外形的所作のみからでは推認できない、という相対化された到達不能性に解釈し直される。

2. 研究の目的

（1）本研究の目的は、（A）人間の行為一般を、何かのフリをしたり、真似をしたり、演技をしたりすることと同じ構造を備えたものとして分析し、（B）その分析にもとづいて、社会哲学（ないし道徳哲学）の新しい原理を提起することである。

（2）フリ・真似・演技は、行為者と観察者の共有する典型的行動パターンを一種のシナリオとして成立する共同行為であり、幼児期の道徳や言語の習得に深く関わっている。従って、本研究の目的は、（A'）個人の意味を、共有されたシナリオの下での行為の発動と関係づけ、（B'）個人主義（individualism）を含みつつ、これを超える社会哲学の原理を模索すること、である。

3. 研究の方法

（1）人間の社会的行為を演技として見るという、本研究の基本的な立場の正当性を、自己犠牲的行為という行為類型に即して論証する。併せて、環境に組み込まれた行為の制約条件を、行為を産出する社会的シナリオ

として行為者に優越する水準で導入することの正当性を事例研究によって提示する。

（2）虚構の物語を語る (fictional storytelling) という言語行為に着目し、物語に関して複数の人々が共通の理解を形成する意味論的なメカニズム、及び、虚構の登場人物に愛着や嫌悪を感じたり、共感や反感を抱いたりする情緒のメカニズムを、K・L・ウォルトン (K. L. Walton) ジョン・サール (J. Searle)、デイヴィド・ルイス (D. Lewis)、グレゴリー・カリー (G. Currie) 等の研究に拠りつつ、考察する。

（3）演技的行為や神話的世界理解による集団形成の実態を、未開社会や石器時代に関する報告を通じて把握し、西洋近代の知性主義的な集団形成の理論枠組みと対比して考察する。

（4）K・L・ウォルトンのごっこ遊び概念による藝術作品の解釈の理論を詳細に検討する。これによって、人間の行為一般が、現実世界の身体を虚構世界に移し入れて行為するという構造、言い換えれば、理念の中での身体の動作という構造を持つことを明らかにする。

（5）ウォルトンのごっこ遊び概念による藝術解釈の理論を、現実の行為の局面に適用し、共同的な力（すなわち、権力）の下における人間の行為の分析を行なう。これによって、個人と社会の関係のあり方を分析する。

4. 研究成果

（1）自己犠牲に関する行為論的な分析を行ない、自己犠牲的行為は演技的水準を導入しなければ十全に説明できないことを論証した。ひいては、人間の行為に対しては演技的水準を導入して解釈を行なうことが不可欠な場合があることを論証した。[主な発表論文の]

（2）英語の「will」と日本語の「意志」の使用規則の違いに着目し、「意志」に顕著に見られる状況依存性を導入すれば、意志の弱さ（アクラシア）や自己欺瞞といった西洋哲学の「the will」概念に固有の難問が、無理なく解消できることを示した。一般的に述べれば、環境に組み込まれた行為の制約条件を、行為を産出する社会的シナリオとして行為者に優越する水準で導入すれば、個人の the will にともなう難問が消滅すること、並びに、個人主義とは異なる社会構成の原理が洞見されうること、を論証した。[主な発表論文の]

（3）暴力を是認する神話的言説の中で、類人猿とは異なるヒトの集団的な行動規則、すなわち道徳的な諸規則が発生する、という人類学的見通しを明らかにした。

太古の神話的言説は、しばしば狩猟活動のための虚構の枠組みとして機能しており、この虚構の枠組みの中で、狩りにおける動物殺

し、すなわち環境を共有する仲間の殺害とその肉の利用が正当化される。これが人類の始原のイデオロギー的な装置であり、シャーマンはこの装置を機能させる主たる行為者である。

この構造は、ヒト社会の基盤に、権力と道徳を形成する演技的な振る舞いの層が存在する、ということの意味するものである。[学会発表の]

(4) ジョン・サール、デイヴィッド・ルイス、グレゴリー・カリーの虚構の理論を分析し、これらの理論がいずれも「何かのフリをすること (pretense)」という心的態度に虚構の語りの基礎を置くのにも関わらず「フリをすること」自体の分析を欠く、という欠陥を持つことを明らかにした。

サールとカリーは、語用論的な関心に沿って虚構の語りを分析し、断定するフリをすること(サール)、またはごっこ遊び的に信じていること(カリー)を、虚構の語りの基礎であるとする。ルイスは意味論的な関心に沿って分析し、言語と可能世界の対応関係から虚構を特徴づけるが、可能世界を設定する際に、フリ行為 (pretense) の概念を利用する。これらの理論は、虚構の根底に「何かのフリをすること」を見出し、かつ、それ以上分析しえない原始概念 (primitive concept) としてそれを扱う、という構造的欠陥を持つ。

この欠陥は、言語だけではなく画像や身振りまで含めて記号解釈のメカニズムを分析し、象徴一般に共通の、非現実の提示効果(ごっこ遊び的な提示効果)を与える認知と行動の基礎的構造を取り出すことによって、克服可能であるという見通しが得られた。[主な発表論文の]

(5) J・D・ルイス=ウィリアムズによる旧石器時代の洞窟壁画の象徴論的な研究を踏まえ、西洋哲学の知性主義の伝統が、洞窟壁画によって示唆されるシャーマン的な活動とどのように対立するのかについて、原理的な考察を行なった。知性主義は、政治的・宗教的共同体の不合理な力(権力性)に直面するとき、しばしば無力さをあらわにする。シャーマン的なトランスは、知性主義の抑制を外して人々を不合理な共同行為に巻き込む政治的な仕掛けとして機能するという洞察が得られた。[主な発表論文の]

(6) 象徴一般に伴う非現実の提示効果(ごっこ遊び的な提示効果)を与える認知と行動の基礎的構造を取り出すために、K・L・ウォルトンのごっこ遊び概念による藝術作品の解釈の理論を詳細に検討した。

ウォルトンは、想像力の基本的な構造の分析から考察を始め、最終的には、藝術作品を小道具 (props) として人々が各人のごっこ遊び世界を形成し、その世界におけるごっこ遊び的行為(虚構世界における身体動作)を通

して藝術作品が解釈される構造を描き出している。

ウォルトンの藝術理論の検討により、象徴活動を包摂する行為一般が(すなわち、動物的・生理的欲求によらない行為一般)、現実世界の身体を虚構世界に移し入れて行うするという構造、つまり身体の想像世界での演技的所作という構造を持つこと、が明らかとなった。[主な発表論文の]

(7) 虚構における行為を分析するために、日常生活の中での虚偽に対する感情反応と、藝術作品の虚構表現に対する感情反応とを対比した。すなわち、日常生活ではウソと分かっている話に感情を動かさないが、藝術鑑賞ではなぜ作り話に泣いたり笑ったりするのか、という問いを取り上げた。

藝術鑑賞をごっこ遊びの一種と見なすケンダル・L・ウォルトンの理論によれば、藝術作品の「美的」な特質によって、人は擬似的な感情反応を抱き、ごっこ遊びの中でこの擬似感情が真の感情として体験される、と解釈される。藝術作品の「美」と、虚構世界における「真の感情」とは、共同的な力とその力に対する自発的な服従というように読み替えることができる。したがって、藝術鑑賞の分析において、権力の作用の下で生きている私たちの行為を分析する手がかりがあることが明らかになった。[主な発表論文の]

(8) ごっこ遊びにおける「共同的な力」への自発的な服従という分析枠組みを、アジア太平洋戦争における日本人戦犯の心理と行為に適用した。兵士らは、「善」であるかどうかに疑いの残る命令に自発的に服従するとき、ちょうどごっこ遊びに参加する幼児のように、自分の事実認識を保持したまま、権力によって設定された虚構の枠組みに沿って身体を動かした、と解釈できる。

この演技的な構造を想定するとき、「しかしかの行動は自分の意志で行なったものではない」という兵士らの弁明は、たんなる自己欺瞞とは異なるものとして、すなわち、俳優のセリフや所作は俳優個人の意志から生み出されたものではない、という自明の真理を語る言葉として理解することが可能となる。こうして、演技的な行為を通じて形成される虚構世界の共同性は、しばしば行為者の「素の」水準に、虚構世界においては実現されなかった(すなわち、シナリオから予測できない)私秘的な領域を作り出すことが明らかにされた。[主な発表論文の]

(9) 古代ギリシアでは、演技者は「ヒュポクリテース (ὕποκριτής)」と言う。英語の「hypocrite 偽善者」の語源である。西洋近代世界では、個人の演技的行為は、ウソを吐くことや偽善的振る舞いと同様に、強く忌避される。ところが、すでに研究成果(1)で明らかにしたように、自己犠牲的行為を説明す

るためには、演技的構造を利用する説明枠組みが不可欠である。すると、近代的個人は自己犠牲の存立し得ない条件の下に置かれることになる。しかるに、イエスの自己犠牲は西洋近代世界の道徳的な基盤の一つである。ここに、合理的個人は自己犠牲を為しうるのか、という問題が出現する。

この問題は、近年ヒースウッドによって、「自己犠牲論法 (the argument from self-sacrifice)」と名付けられ、幾つかの議論が提出され吟味されている。近代的個人は合理的に自己犠牲的行為を為しうるという立場に立つオーバーボルドの議論と、同じ立場を別の枠組みで論証するヒースウッドによる議論を検討し、彼らの論証を論駁した。さらに、この両名の議論を越える射程を備えたチャールズ・テイラーの個人の概念を検討し、合理的個人は、実は暗々裡に共同的な理念に服従することによってのみ、十全な個人たり得るという逆説が成り立つことを確認した。
[主な発表論文の]

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

田村均、2015、「善と個人 個人における共同的な善への服従について」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 61号、pp.1-43.

田村均、2014、「権力の下での行為 日本人戦犯の心理と行為の演技論的考察」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 60号、pp.1-56.

田村均、2013、「虚構世界における感情と行為 ケンダル・ウォルトンの虚構と感情の理論」『名古屋大学哲学論集』第 11号、pp.1-34.

田村均、2013、「虚構制作の根源性 ケンダル・ウォルトンの虚構論」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 59号、pp.1-34.

田村均、2013、「なぜシャーマンと絵とダンスが哲学の問題になるのか？」『哲学フォーラム』第 10号、pp.1-10.

田村均、2012、「虚構の語りと言語行為論」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 58号、pp.1-29.

Hitoshi Tamura, 2011, "Will" and "Ishi": Explanation of Action in Cross-Cultural Perspectives. *Journal of the School of Letters, Nagoya University*, Volume 7, pp.1-13

田村均、2010、「自己犠牲的行為の説明 行為の演技論的分析への序論」『哲学』(日本哲学会編) 第 61号、pp.261-176

[学会発表](計 1件)

田村均、研究発表「暴力の是認と道徳の起源」応用哲学会第 2 回年次研究大会 2010 年 4 月 25 日、於北海道大学.

大会プログラム:

<https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=ZGVmYXVsdGRvbWFpbncqYWNhcHdlYnxneDoyMm13NzE4OTE5ZDZzMWY3>

発表資料:

<http://hdl.handle.net/2237/13929>

[図書]

該当無し

[産業財産権]

○出願状況

該当無し

○取得状況

該当無し

[その他]

ホームページ等

該当無し

6. 研究組織

(1)研究代表者

田村 均 (TAMURA, Hitoshi)
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号: 40188438

(2)研究分担者

該当無し

(3)連携研究者

該当無し